



九百枚近い私の新作『夜は終わらない』の主人公、西来玲緒奈に出会ったのは、震災の前の年、ヨガ教室でのことだった。

当時の私は、趣味のフットサルに年齢的な限界を感じており、より高齢まで続けられる運動としてヨガを始めたのだった。本格的なコースではなく美容と健康のクラスを選んだので、当然ながら生徒たちは女性ばかり、男性は一人二人しかいない。

指導が始まるまでの時間、私は女性たちがぼつぼつと交わすおしゃべりを聞くことになる。その日はお互いに有名人の誰に似ているかを言い合っており、一人が「西来さんって、ちょっと伊調馨だよね」と言ったら、別の一人が「確かに、女王様入ってるし」と同調した。私はその悪意混じりのやりとりをひやりとしたが、玲緒奈は「うーん、女王様っていうか、自分では『アラビアンナイト』のシヤハリヤール王のほうが近いかな」と言った。

みんなは呆れたニュアンスをかすかににじませ、「王様ですか」ただけ言った。だが、私は秘かに度肝を抜かれていた。『アラビヤ

ンナイト』の王様と言えば、妻の不貞を機に、毎夜、処女と寝ては翌朝に首をはねたという変態冷酷漢ではないか。

周囲の空気をよそに、玲緒奈は自分のカバンから文庫本を取り出すと、『アラビアンナイト』、とんでもなく面白いのよ。芸術性も高くて。例えばね、老婆災厄（どら）の母っていう、とてつもない悪女が出てくるんだけど、その説明がすごい。ちょっと読んでみるね」と朗読まで始めた。

「これはまったく、おそろしく見つともない婆（ばあ）でした。（中略）若い男の奴隷たちには、無理矢理自分に乗らせ、若い女の奴隷には、こんどは自分が乗るのが好きだったのでした。こうした処女たちをくすぐることで、自分のからだをその若いからだにこすりつけることが、無二の好物なのでした。そしてこのくすぐりの術にかけては、おそろしく名人で、まるで食人鬼（グレイ）のように、処女たちのいみじき場所をしゃぶったり、乳房をいい気持ちにいじくってやったりすることが上手でした。そして最後の療摩（りょうま）に行かせてやるために、サフ

ランを調製したもので、その陰門を浸してやるのでした。そうされると女たちはいい気持で死にそうになって、老婆の腕の中に飛びこんでくるのです。」（佐藤正彰訳『千一夜物語3』ちくま文庫）

朗読はインストラクターの登場で打ち切られた。一同の間にほつと安堵する空気が広がる。私一人が興奮していた。新作の長篇では、『アラビアンナイト』を現代日本に移し、役割を交換して、女の命令で男が物語り、それが不合格だったら女が男を破棄するという構造にしたかったのだが、どんな女を設定したらそれが可能なのか、なかなかうまくいかず、悩み続けていた。その解決策が目の前にいるではないか！

私は意を決して、教室が終わった後、シヤハリヤール王との共通点をもっと具体的に聞きたい、と玲緒奈に話しかけた。玲緒奈は応じ、私たちは近くのイタリアンレストランに行った。玲緒奈は、具体的に話すのはかまわなけれど、一般的にはこの社会では許されないような内容も含まれているから、覚悟して聞いてほしい、と言っ

た。何を覚悟すればいいのかと問い返せば、世の中には知ってはいけない秘密ってあるでしょ、それを知った人はもう普通には生きられないじゃない、それと同じこと、知った人はいわば共犯者だから、一生を背徳者として終える覚悟を決めてほしいってこと、と答える。私も小説を書くにはそのぐらいの腹は括っているつもりだから、了解した。さてさて、星野さんは虎穴に入って虎兇を連れ帰れるか、と玲緒奈は笑って話し始めた。終わると、じゃあ、トリスタンに餌をあげないといけないから帰るね、と言って店を出ていった。それっきり、西来玲緒奈とは会っていない。

それなのに私は、玲緒奈がその後何をして今どうしているのかを熟知し、書き続けている。私はあのまま玲緒奈の話の中に閉じ込められて、物語の中を生きているからだ。虎兇は得たが、虎穴から出られないでいるのだ。それがどのような物語か、話の中から抜けられなくてもかまわないと覚悟を決めた者は、『夜は終わらない』をひもといいてみるといい。

（ほしの・ともゆき 作家）